

東京医科歯科大学医学部保健衛生学科における 国際化の取り組み

沢 辺 元 司*

I. 序 言

大学教育の国際化が叫ばれて久しいが、本稿では東京医科歯科大学医学部保健衛生学科における国際化の取り組みを紹介するとともに、本学の国際化の意義、問題点などについて私見を述べる。なお東京医科歯科大学医学部保健衛生学科は検査技術学専攻と看護学専攻より成り、学部学生の定員がそれぞれ一学年 35 名、55 名である。大学院保健衛生学研究科生体検査科学専攻の前期課程(修士)・後期課程(博士)の定員はそれぞれ 12 名、6 名である。

II. 本学における国際化の取り組み

本学は医療系単科大学としては国際化に早くから取り組み、2012 年には文部科学省のグローバル人材育成推進事業、2014 年にスーパーグローバル大学創成支援事業に採択された。両事業ともに医学科が主体となっているが、保健衛生学科学学生の国際化にも大きく役立っている。現在、本学の学部学生・大学院生はともに約 1,500 人であり、そのうち、海外留学生は学部学生の 1%、大学院生の 15%を占める。また検査技術学専攻の約半数の学生は大学院修士課程に進学している。検査学部学生に海外からの留学生はおらず、大学院ではラオス、台湾からの留学生が各 1 名在籍している。

III. 臨床検査学教育の国際化

臨床検査学教育の中で、国際化を目指す教育がどれほど必要なのであろうか？ 今日医療の現場で、増加する外国人患者への対応が不可欠となっているが、先進医療や先進検査技術教育、グループ医療への参加、医療倫理教育、医療安全教育などの課題と比較して優先順位は必ずしも高くない。しかし、本研究科を含めてグローバル大学教育、特に教養教育の国際化は必須である。現在、世界情勢は激変しており、医療を含めて、科学、政治、経済、文化などの多様な分野で急激な変化を遂げている。この激動する世界の中で、学生たちは卒業後 40 年余りに渡って、生きていかなければならない。英オックスフォード大学で人工知能(AI)などの研究を行うマイケル・A・オズボーン准教授が、2013 年に発表し世界に衝撃を与えた論文¹⁾によれば、臨床検査技師が「今後 10~20 年で消失する職業」に含まれている。臨床検査技師の職業が日本でなくなることはないと思うが、その内容が著しく変わることは容易に想像できる。オズボーン論文で注意すべき点は、この論文がアメリカにおける雇用を述べている点である。世界人口の 80%が居住する開発途上国においては、臨床検査技師の需要は大変大きい。

*東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科分子病態検査学分野 m.sawabe.mp@tmd.ac.jp

IV. 本学保健衛生学科における 国際化の取り組み

生体検査科学専攻では学部学生・大学院生の短期海外研修、留学支援、海外からの留学生受入、教員の留学を積極的に推進している。大学院生の留学支援、海外からの留学生受入の取り組みが研究科の国際化に大きく寄与するが、短期海外研修はその導入として特に有意義である。以下、本研究科で行っている、検査学生を派遣する短期海外研修4プログラムとその支援体制について簡単に説明する。

1. タイ チュラロンコーン大学研修・学生受入 (写真1)

首都バンコクにあるチュラロンコーン大学保健医療学部との相互交流であり、毎年、夏に本学検査技術学専攻から5名程度の学生が研修し、チュラロンコーン大学臨床検査学科から5~8名の学生を受入れている。ともに10日間のプログラムであり、チュラロンコーン大学においては主に大学内ラボでの実験、講義、実習参加、周辺病院の見学、農村地域での健診実習への参加や、それらを通じた学生交流を行っている。チュラロンコーン大学からの学生受入では主にラボでの実験参加、周辺病院の見学が主体となっている。学生の相互受入により、研修に参加した両大学の学生が十分に交流できる点が大変優れている。



写真1 タイ チュラロンコーン大学学生の病理検査実習

2. ラオス保健科学大学研修(写真2)

東南アジアにある後発開発途上国であるラオスでの夏期の10日間のプログラムで、検査・看護から5,6名の学生(大学院生を含む)および1,2名の教員が参加している。首都ビエンチャンにおけるラオス保健科学大学、国立病院見学、NPO参加、JICA事務所での講義と、農林部タケクにおけるNPO参加を行っている。上記NPOはともに日本の医療保健関係NPOであり、学生が実際に国際協力の分野で活動している医療関係者と直接対話できる良い機会となっている。

3. ネパール短期海外研修

南アジアにある後発開発途上国であるネパールでの春期の10日間のプログラムであり、検査・看護から5,6名の学生(大学院生を含む)および1,2名の教員が参加している。首都カトマンズおよび地方都市で医学校、看護学校の見学・学生交流、病院・診療所見学などを行っている。日本ではハンセン病の新規患者は見られないが、ネパールでは依然多くのハンセン病患者が存在し、ハンセン病専門病院の見学は日本では経験できない機会となっている。

4. フィンランド セイナヨキ応用科学大学研修

北欧フィンランドにあるセイナヨキ応用科学大学で行う、夏期(時に春期)の2~3週間のプログラムで、看護学生・大学院生を主な対象としているが、検査学生も参加している。教員は短期、随行する。大学での講義、実習参加、病院、保健所、老健施設での見学、実習、ホームステイを行っている。看護、医療の先進国フィンランドでの貴重な体験が得られる。

5. 短期海外研修支援体制

全学組織として統合国際機構が設置され、学生派遣係、学生受入係が学生に丁寧な指導を行っている。保健衛生学科では国際教育研究センターを設置し、研究科の国際化、特に短期海外研修の計画、実施、候補学生の選出に大きな役割を担っている。学生にとっては短期海外研修にかかる費用負担が大きな問題であるが、本学ではほとんどの学生がJASSOからの奨学金(6~8万円)を受け取



写真2 ラオス農村部での地域住民に対する母子保健教育見学

っている。この奨学金は海外からの受入学生にも支給されている。また少数の特に優秀な学生に対しては、大学からは研修期間(2週間以上)に応じた海外研修奨励金(20~50万円)が支給される。また、長期の海外研修・留学を希望する保健衛生学研究科学生2名が文部科学省の「トビタテ!留学JAPAN」からの奨学金を受給することができた²⁾。留学中の安全保障については派遣学生のOSSMA申請を義務づけている³⁾。

V. 現在の問題点

医学系分野の教育は、ビジネスや科学分野の教育に比べて国際化が遅れている。その理由として医学系教育の分野では国家試験が日本語でのみ行われているからである。それゆえ、臨床検査学に限らず、医学、看護学領域の学部教育においては事実上、日本語を勉強し漢字が書ける非常に高い日本語力を有している中国人や韓国人のみが日本への留学および医療系国家資格の取得を可能にしている。

臨床検査学の大学院教育では研究が主体であり、日本の臨床検査技師国家資格の取得は問われないので、外国人留学生の受入は可能である。現在、生体検査科学専攻および全学の問題点として以下のものが挙げられる。

- ① 英語でのコミュニケーション能力が低い。TOEFL ITP のスコアも 450~500 点であり、十分なコミュニケーション能力があると評価される iBT 80 (ITP 550 換算) に達する学生が少数である。
- ② 海外研修、海外留学、国際医療に興味を持つ学生の割合が低い。
- ③ 大学院教育で、英語で行われる講義が少ない。特に学外からの講師に英語での講義を依頼するのが難しい。
- ④ 海外からの留学生用の寮が不足しており最も家賃の低い寮は1年間しか住めない。
- ⑤ 事務系職員の英語でのコミュニケーション能力が低い。そのため海外留学生向けの文書も日本語で記載されることが多い。
- ⑥ 海外からの留学生受入に消極的な部門も多い。
- ⑦ 短期海外研修などをアレンジする教官の負担が大きいが、それをサポートし、評価するシステムがない。

文 献

- 1) Frey CB, Osborne MA. The future of employment: how susceptible are jobs to computerisation. Oxford Martin Programme on Technology and Employment, 2013.
- 2) <http://www.tobitate.mext.go.jp/>
- 3) <https://emergency.co.jp/service/education/>